

# 小学校におけるカリキュラム・マネジメントの実際

## — 生活科・「総合的な学習の時間」を中心として —

鈴木 隆 司\*

千葉大学・教育学部

### Curriculum Management on Elementary School in Japan

#### — About Living Environment Studies and Integrated Studies —

SUZUKI Takashi\*

Faculty of Education, Chiba University

現在、日本では教育課程の編成において、教科横断的な内容を取り入れたカリキュラム・マネジメントの必要性がクローズアップされている。現行では教育課程は学校が編成することになっている。中でも、最も教育現場の裁量によって内容を編成することができる教科・領域が生活科・「総合的な学習の時間」である。本小論では、先行事例としてこの教科・領域において教育課程の自主編成を行ってきた東京私立・和光小学校の事例を検討した。和光小学校では「生活べんきょう」・「総合学習」を教育課程に位置づけていった理念と実際の連絡、学習のテーマ決定に至る経緯、教育内容の決定への子どもの参加を軸としたカリキュラム・マネジメントが行われてきた。検討の結果、小学校におけるカリキュラム・マネジメントとしては、子どもの生活を軸として、子どもにとって切実な内容を子どもの手で掴ませるために、子どもに教育内容の決定に参画させる必要があることがわかった。

キーワード：カリキュラム・マネジメント (Curriculum Management) 生活科 (Living Environment Studies)  
総合的な学習の時間 (Integrated Studies) 教育課程の編成 (Organization of the curriculum)  
小学校 (Elementary School)

### 1. はじめに

公立の小学校においては、学習指導要領第1章総則第2節教育課程の編成において、「各学校においては、法令及びこの章以下に示すところに従い、生徒の人間としての調和のとれた育成を目指し、その心身の障害の状態、発達段階及び特性等、地域や学校の実態並びに学科の特色を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとする。」と記載、教育課程の編成は学校が行うとしている<sup>1)</sup>。しかし、教育課程は各学校がまったく自由に編成できるわけではない。1958年以降、学習指導要領が法制化されたため、現在では教育課程はその基準である学習指導要領に則り編成しなければならないとされている。つまり、公立の学校においては、実質的には学習指導要領の範囲内で教育課程が編成されており、その自由度は制限されていると言わざるを得ない。その後、この制度は一貫して守られてきたが、平成20年版の学習指導要領改訂において、指導内容が「大綱化」され、学校の裁量が拡大されつつある。こうした流れの中で、次期学習指導要領改訂を控えた現在、教育課程編成に関して「カリキュラム・マネジメント」がクローズアップされている。「カリキュラム・マネジメント」とは、子どもたちや学校の実情に適合する教育課程の編成を求めて出された学習指導要領の理念を実現するために必要な方策のひとつとされており、一見すると子ども達や学校の実状に応じて教育課程を編成することができる、つまり、教育課程の編成の自

由度が拡大されたと受けとめることができる方策とされている。

「カリキュラムマネジメント」を次期学習指導要領改訂と関連させて提起した教育課程企画特別部会「論点整理」によると「カリキュラムマネジメント」とは、学校教育の目標に向けて、子ども・地域の実態をふまえて教育課程を編成、実施・評価・改善という一連のサイクル (PDCAサイクル) を計画的・組織的に運用すること、並びにそのための条件整備をすることであるとされている<sup>2)</sup>。そこでは「カリキュラムマネジメント」には3つの側面があるとされている。1つは、PDCAサイクルを回すということである。2つめは、教育内容を相互に関連づけて教科横断的な取り組みを行うことである。3つめは、教育内容と条件整備を一体として捉えるということである。本小論では、とりわけ2つめの側面から「カリキュラムマネジメント」の実際について検討する。つまり、ひとつの教科だけでは充分とらえることができない教育内容を組織するという点から「カリキュラムマネジメント」を捉える。このことを現行の学習指導要領で実現可能な範囲で考える。教育内容の構成が他の教科・領域と異なり、子どもの活動に寄り添って授業が展開される必要性が高い教科・領域としては、生活科及び「総合的な学習の時間」があげられる。そこで、本小論では、生活科及び「総合的な学習の時間」を中心とした「カリキュラム・マネジメント」について検討する。

こうした「カリキュラム・マネジメント」の先行事例として、本小論では公立小学校と異なり、教育課程を自主的に編成してきた私立学校の例を取りあげて検討する。

\*連絡先著者：鈴木隆司 t-suzuki@faculty.chiba-u.jp

東京・私立の和光小学校は、生活科及び「総合学習的な学習の時間」を教育課程の領域の1つとして、特色のある教育課程の自主編成を行ってきた。和光小学校では生活科及び「総合的な学習の時間」について、1970年代から「総合学習」として、教育課程の領域の1つに位置づけた編成に取り組んできた。和光小学校では、学校の教育課程の領域を①教科②自治的活動③「総合学習」の3つとして編成している<sup>3)</sup>。以後、一貫して「総合学習」を教育課程の柱の一つとして教育課程全体を編成している事例としては検討に値すると考える。さらに、和光小学校の「総合学習」(後、「生活べんきょう」を含む)は「子どもと教師がつくる手づくりの教育課程」を標榜しており、内容構成において特色ある展開がされている。教育課程編成上、形式・内容ともに特色がある和光小学校の教育課程編成について検討し、その成果と課題を見出すことは、今後の公立小学校における「カリキュラム・マネジメント」を実施していく上で参考になると考える。ここで「参考」といっても、生活科及び「総合的な学習の時間」の教育課程編成は、特色ある学校の先行例をまねて行うものではないことに注意しなければならない。「カリキュラム・マネジメント」は、これからの学校をどうするかというビジョンや子どもが学びたいと思っている学習はどのようなものなのかといった、子どもや学校の実情にあった教育課程を編成するといった基本的な理念を出発点にして考えていく必要がある。単に先行例から型式や方法だけを学び取るのではなく、教育課程の編成については、理念を明確にした上で、構造的・内容的な側面について「参考」にする必要があることを付記しておく。

本小論では、和光小学校並びに和光鶴川小学校の「生活べんきょう」及び「総合学習」の教育課程編成について「カリキュラム・マネジメント」の視点からその実際について考察して、成果と課題を示すことを目的とする。なお、筆者は1992年から2004年まで、和光小学校に勤務して「生活べんきょう」及び「総合学習」の実践に関わってきた。本小論では、こうした実務経験もふまえた上で考察する。

## 2. 学校全体の教育課程と「生活べんきょう」・「総合学習」の位置

和光小学校の教育課程編成の基本的な考え方は先述したように「手づくり教育」という言葉で示されている。和光小学校では、学園創立以来、子どもの「全体的発達」「人格的発達」を目指して全教育活動を進めてきた。そのためには、子ども自身が「内面に問い」を持つことができるような人類の文化遺産(科学・芸術・技術・文化等)の中から子どもの発達にとって最良のものを選び取り、提示することを大切にしてきた。そうした教育を実現するためには、教師が目の前にいる子どもたちの生活現実や社会に対する関心を喚起して、そこから導き出される問いに応える教育活動を展開する必要があると考え、教育課程の自主編成に取り組んできた。そのため、基本的には検定教科書は使用せず、目の前の子どもにあわせた授業プリントを作成して授業を進めている。算数や国

語では、それらの成果をまとめて独自の「授業書」を作成している。こうした自主的に編成された和光小学校の教育課程のねらいは次の3点である<sup>4)</sup>。

1. 人間としての発達を保障する
2. 知育と訓育の統一をめざす教育課程を編成する
3. 学習意欲と学ぶ喜び、自主性と自律性をそだてる

和光小学校では、このねらいをもとに「下からの教育課程づくり」を実施した。和光学園は、1933年11月10日世田谷区経堂に、教職員7名、児童数33名の小さな私立の小学校として誕生した。その後、1947年に中学校、1950年に高等学校、1953年に幼稚園ができ、1966年に和光大学が開学した。この成立過程をみていくと、小学校を基盤として上級学校が整備されていった、いわゆる上構型学校系統をとっていることがわかる。こうした学園の沿革からも、和光学園が教育課程編成において「下からの教育課程づくり」、つまり低年齢から子どもの発達・成長に適合した教育課程編成に取り組んできたことが分かる。和光小学校の「下からの教育課程づくり」では「発達のプロセスを縦軸に、学校教育の領域を横軸にとって」教育課程が編成されている<sup>5)</sup>。これは、その年齢の発達課題を実践的に明確にして、その上で課題に応じた内容を展開することができるという現場に自由度を持たせた教育課程を編成することを意味している。私学の多くが取り組むような、将来的に上級学校へ進むための準備教育として下級学校を位置づけたり、有名大学進学を目指しての準備教育を行ったりはしない。そのために、大胆に教育内容を整理している。

例えば、学習指導要領では小学校で学習する漢字は1,050文字とされているが、和光小学校ではこれを750文字としている。これは、学習指導要領で示された1,050文字を子どもの生活現実と合わせて考えたところ、そのうちおよそ300文字は子どもの生活上ほとんど使うことがないものであり、その年齢の子どもにとって必要ではないものになっていると考え、教育課程から削除することとしたためである。例を挙げると、「陛下」という字は子どもの生活現実から使う機会がほとんどなく、かつ子どもの発達・成長にとってあまり意味をなさないと考え、学習の対象から削除した。

同時に、学習の順序を子どもの生活にあわせている。3年生になると時間割を漢字で書けるようにしようということにして「算数」や「技術」といった画数の多い文字であっても学習の対象とした。こうした考え方が「下からの教育課程づくり」の具現化であり、子どもの生活を基盤とした教育課程編成を可能にしていると言える。

こうした考え方をもとに、現在の和光小学校では、教育課程の構成について、①教科教育②行事や自治活動等の教科外教育③生活べんきょう・総合学習の3つの領域を柱として編成している<sup>6)</sup>。では、なぜ和光小学校ではこの3領域で教育課程を編成しているのだろうか。

教育には、文化を伝え認識を発達させる機能と、行動を通して人と交わる能力を育てる機能がある。和光小学校が標榜する人格形成はこの両者の側面をもってなされる。和光小学校では、教科教育において、科学・技術・芸術並びに価値ある文化に関する認識を形成してきた。そして、行事や自治文化活動等の教科外教育において、

人と交わる能力を育んできた。さらに、両者をひとつのものとするまとまった学習領域として「生活べんきょう・総合学習」を位置づけた。「生活べんきょう・総合学習」によって、子どもの科学的な認識と生活現実の理解を繋げることにより、現実的な問題や実生活とつながる問題をとらえ、それらを改善・創造していくことができる教育への道を開こうとした。

「生活べんきょう・総合学習」では、子どもにとっても、社会にとっても切実で現実的な問題を取りあげ、そこからテーマを構成して学ぶ。現実的な問題は、「多くの要素と関連を含む豊かな総体」である。現代では、複雑な現実の問題については、要素に細分化されて学ばれている。ところが、現実の問題は、要素が複雑に絡み合って存在しており、これを細分化して捉えるだけでは十分に捉えることができない。こうした現実の問題を子どもが自分の中に取り込んで人間的な発達を遂げるためには、現実の問題を細分化することなく捉え、体験的・実感的に学ぶ領域が必要となる。そうした総合的な学びを展開する領域として「生活べんきょう・総合学習」を位置づけた。

和光小学校の現在の教育課程を表1に示す。表では「生活べんきょう」は、社会、理科、工作・技術、学級活動及び表現を含むとされているが、実際には自治文化を含んだ内容を有する領域とされている。

「総合学習」は学校の実状に合わせた単元構成ができるようにされた。最初は週あたり1時間で実施していた<sup>7)</sup>が、「総合学習」にかける学習には時間がかかることから、1995年の教育課程の改訂で4年生以上の「総合学習」の時間数を3時間に増やした。現在は3年生で週2時間、4年生以降は週3時間をあてている。

和光小学校がこのように「生活べんきょう・総合学習」を教育課程の柱のひとつとして位置づける考え方の基盤としたのは、1970年代に日本教職員組合・教育制度検討委員会が提起した一連の報告並びに同・中央教育課程検討委員会が提起した「教育課程改革試案」による提起であった<sup>8)</sup>。これらの委員会では、教育課程に「総合学習」を取り入れることを提起している。和光小学校は、いわばその実験校として教育課程を編成・実施したといえる。

和光小学校が1975年に低学年に初めて「総合学習」を位置づけた当時の様子について次のような記述がある。「71年度に初めて1年生を担当した西口は、社会科や理

科を、「たんけん」と名づけて、子どもたちを学校の内外につれ歩き、自然や社会についての直接経験を重視した実践を始めた。あひるの飼育を中心に、近くの東京農業大学や八百屋さんとの交流を持ったりした。教育制度検討委員会が提案した「総合学習」にあたるものは、このような形で低学年にあったし、高学年でも学習旅行を中心とした一連の取り組みが川上、嘉部、平林らによって手がけられていた。」<sup>9)</sup>

和光小学校では、1974年に教育課程編成の議論を俎上にのせた。「総合学習」の導入については次のような記述がある。

1974年末の職員会議において、丸木政臣校長（当時）から、低学年に「総合学習」が位置づけられる提案「これからの小学校教育を考える」が提出された。「低学年におかれた「総合」だが、「思い切って教科の枠をはずして、あそび、表現活動、飼育、栽培、道具を使っの製作活動を重視し、集団生活や労働体験を豊かにする」ものとして出発した。」<sup>10)</sup>このように和光小学校の「総合学習」は低学年から始められた。その際、ものをつくる分野で「総合学習」の運用の実際が伺える記述がある。「物を作る分野は、技術専科として和光鶴川幼稚園から小学校にもどった宮津と低学年教師との二人担任制で出発した。専科教師の専門の立場からのリードにより、当初、あそびと結んでのおもちゃ作りの発想しかもたなかった分野だが、素材に応じた加工の方法や技術を正しく教え、獲得させていく系統的な「技術科教育」として着実に発展してきた。」<sup>11)</sup>

この記述を見ると、低学年の「総合学習」は当初、二人担任制によって取り組まれていたことがわかる。そのため、内容的に深まった学習が可能となったとされている。低学年であっても、専門的な見地から内容や教材が吟味される必要があると言えるだろう。二人担任制の取り組みは1983年に発展的に解消され、学級担任がひとり担当することになった。

このような経緯から、和光小学校では次の5つを低学年の教育像として描き出し、それを実現する教科構想は「総合学習」しかないと判断して、低学年に「総合学習」を設置することに踏み切った。

1. 遊びや日常生活をとおして子どもたち同士のつながりを形成する。
2. 書く、話す、聞く、描くなどの自由な表現活動を共

表1. 和光小学校教育課程表（2016年版）

	社会	理科	工作・技術	学級活動	国語	算数	体育	音楽	美術	総合	自治文化	計
1年生	生活べんきょう6 (表現1を含む)				7	4	2	2	2	—	—	23
2年生	生活べんきょう6 (表現1を含む)				7	5	2	2	2	—	—	24
3年生	2	3	2	1	5	5	2	2	2	2	1	27
4年生	2	3	2	1	5	5	2	2	2	3	1	28
5年生	2	3	2	1	5	5	2	2	2	3	1	28
6年生	2	3	2	1	5	5	2	2	2	3	1	28

有する。

3. 自然や社会にたいする新鮮な感動や、調べてみたいという興味を育てる。
4. さまざまな学習活動、とくに芸術的活動によって、豊かな感覚・感性を育成する。
5. 発達に応じた手仕事や労働を通じて、手や指の巧緻性、体の均衡をつくる<sup>12)</sup>。

ここで特徴的なのは、和光小学校の低学年・「総合学習」は、生活科と異なり自分自身の内側に教育内容を閉じていないことである。生活科は「自立への基礎」を育成することを目標として自分との関わりから内容を構成している。和光小学校の低学年・「総合学習」は、子どもの関心を自分自身の内に閉じてしまうのではなく、「子ども同士のつながり」や「労働」といった協同的な学び合いを標榜している。こうした教育内容を社会に広げて考える理念が、その後の中・高学年の「総合学習」に引き継がれていくことになった。

その後、1985年に低学年の「総合学習」を「生活べんきょう」として、教育課程が再編された。この時、中高学年に「総合学習」が導入されることになり、「第三の領域」として「総合学習」が全学年で実施され、教育課程が3領域構成として確定した。この時まで、「総合学習」の先行実践として、次のような取り組みがあったとされている<sup>13)</sup>。

- ・根っこを求めて（4年・あらゆる物の原点＝由来を調べてまとめる）
- ・私の10年史（4年・第二次性徴、出生から10歳までの生い立ちの聞き取りレポート、狼に育てられた人間の学習）
- ・体の学習（全学年・養護教諭の授業）
- ・農業レポート・とうふづくり（5年・地域への聞き取り調査に基づく白書づくり、とうふをつくる）
- ・熱気球づくり（5年・班ごとに熱気球をつくって飛ばす）
- ・蚕新聞作り（5年・蚕を育て、糸を取り、布を編む。一方で蚕と人間の歴史、産業、蚕の体・病気などを調べ新聞にまとめる）
- ・総合学習ヒロシマ（6年・一年間にわたり、命、平和、人間、戦争、原爆、などの問題を聞き取ったり調査学習したりする。特別授業もある（丸木政臣校長による）。国語や社会科、学級活動の時間などを当てる。その締めくくりとして現地ヒロシマを訪れる。広島学習旅行を中核にした総合学習）
- ・『思春期の生き方』（6年・担任による性教育）

こうした先行実践を基にしながら中高学年の「総合学習」の教育課程が編成された。この時以来、「総合学習」の教育課程はテーマによって示されていることが特徴となった。当時のテーマは、同時に単元であった。テーマに基づいて指導計画が立てられて、それを単元として構成し、授業が運営されていった。テーマは学校全体で決められていた。一方、教材はその時々で検討して選択した。例えば、5年生は食に関することをテーマとするが、食材はそばであったり、豆腐であったりした。また、学級によって異なった教材を選定したこともあった。教材の選定に関しては、該当学年に任されていた。

その後、1992年に和光鶴川小学校が設立され、和光小学校と基本的に同じ理念でありながら、地域の特性をいかした教育課程が編成されるようになった。

### 3. 「生活べんきょう」及び「総合学習」の教育課程編成の基本的な考え方

#### 3-1. 個別の学びを総合する

和光小学校では「発達の源泉は生活現実にある」という考え方を基本として学びの形成を図っている。そのため、学びによって得た様々な知識や技能を、生活現実をくぐらせることによって、充実した意味あるものにしていけるように教育課程を編成している。学びによって得られた知識や技能は、生活現実の中で鍛えられ、ものの見方・考え方といった世界観や価値観へと高まり、人格形成に深く根ざすようになると考えられている。「総合学習」（低学年においては「生活べんきょう」）はそうした個別の学びを現実世界とつなげ、総合化を行う領域として位置づけられている。

#### 3-2. 「しんの学力」づくり

和光小学校では、これまで言われてきた「学力」は学校的能力に矮小化されていると捉えられてきた。矮小化された「学力」は、生活現実の中から一定の教育的価値に合致したものだけを教材として子ども達に与える中から生まれるものであると批判的に捉えられていた。矮小化された「学力」観からは、結果としては一定の教育的価値＝試験の点数という測定可能なものとして「学力」が捉えられる。試験によって測定可能なものとして知識が切り売りされたものだけを「学力」とみる傾向が著しくなっていた。こうした「学力」を「受験学力」と呼ぶことがある。「総合学習」（低学年においては「生活べんきょう」）は、科学の成果を切り売りするのではなく、科学に込められた様々な人々の経験や願いを含めて、その本質に子ども達を近づけることが大切だと考えられた。そこで、「総合学習」では、子どもにとって現実的で切実な内容を構成することが構想された。こうして得られた能力を和光小学校では「しんの学力」と呼んでいる。

#### 3-3. 内容と方法の統一

「総合学習」（低学年においては「生活べんきょう」）では、子どもが学ぶべき対象を生活現実とつないで教材化している。もちろん、子どもが関心を持つことができない対象でなければ、学ぶことができない。だからといって、子どもの関心を引くためのパフォーマンス、つまり方法としての「学び方」を屈指することが「総合学習」（低学年においては「生活べんきょう」）の主旨ではないと和光小学校では考えられている。そのため「学び方を学ぶ」という方法的な概念で「総合学習」（低学年においては「生活べんきょう」）を捉えてはいない。「総合学習」（低学年においては「生活べんきょう」）では、問題がより現実味を帯びており、自分たちの日常を見つめなおすことができる切実な課題になっていけば、子どもの関心を引くことができるということを実践を積み上げていく中で確かめてきた。「総合学習」（低学年においては



表3. 和光小学校の「生活べんきょう」の教育課程表（ベーシックプラン）1995年版

和光小学校		生活勉強ベーシックプラン 1年生										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
全校活動	入学式 新入生を迎える会	運動会	プール開き	林間学校	プール納め 夏休み発表会	いちょう祭り					朝の会	終業式
学級活動	1年生 ・学校の生活 ・学校生活の生活	進定 ・雑木林探検	班・当番・掃除	合宿を準備しよう	河口湖合宿	夏休み発表会 名人になろう	名人になろう	名人になろう	名人になろう	名人になろう	名人になろう	まごめ会
文化活動	みんなで遊ぼう ・作って遊ぼう ・紙で作る	染めて遊ぼう ・縫う ・作って食べよう	ナイフをつかおう ・描いて遊ぼう ・作って食べよう		指干をばす							
社会	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活	・学校の生活 ・学校の生活
自然												
見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表	見つけた・発表

の内容の有機的な結合の下、各項目での学びの関連を図りひとつの単元として構成している。こうした単元構成の典型が1995年版に現れた⑥「見つけた・発表」の項目である。これらはこれまであった子どもの関心を取り上げ、そこから内容を組み立て、単元を構成するといった項目である。子どもが教室に教材を持ち込み、そこから単元を創りあげることが可能にした新しい取り組みであった。子どもが春について日常生活で見つけてきた実物を教室に持ち込んでくる。それについて子どもが「朝の会」と呼ばれる毎日の学級活動で発表する。この発表に他の子どもが関心を持って、学びが広がる可能性がある」と担任教師が判断すると、教師がそれを引き取って「生活べんきょう」の単元を構成していく<sup>16)</sup>。例えば、ある低学年教師が子どもが持ち込んだ海外旅行のおみやげから「世界の〇〇」という単元を設定した<sup>17)</sup>。この「〇〇」に入るものなら何を持ってきてもよい。そこで子どもが世界のお金を持ち込んできた。毎日、様々なお金が持ち込まれる中、オーストラリアとカナダのコインには「どっちの国も表は動物で裏は同じお姉さんが描いてある」ことに子どもたちは気が付いた。すると、私が持ってきたものにも同じお姉さんが描いてある」といってニュージーランドやイギリスのお金が示された。調べていくと、そこに描かれた人物がエリザベス女王だということがわかった。しかし、どうしてエリザベス女王があちこちの国のお金に登場するのかということ疑問として残った。その後、旗について見ていくと、国旗の中に小さくイギリスの国旗が描かれているものがあちこちにあることも

わかった。こうした子どもが教室に持ち込んだ話題から、世界の国とイギリスはどのような関係にあるのかを調べる学習が始まった。このように、「見つけた・発表」の単元は、子どもが教室に持ち込み、発表したことから学びが始まる新しい「生活べんきょう」の学習形態並びに内容を展開する単元を構成するようになっていった。また、この改訂時からは「手仕事」と「遊び」という項目がなくなり、それらが「文化活動」として再構成された。1985年版にあった「手仕事」には、子どもが作る対象物、つまり教材が示されていた。そこで示されている教材は、作って遊ぶもの・生活で使うものであった。1995年版では、染めて遊ぶ、縫う、作って食べよう、どんぐりで遊ぶ・作るというように、素材や技法によって作る活動が示されるようになった。

さらに1995年版では、学級活動に「名人になろう」が①～⑥と長期にわたって位置づけられている。これは学校全体で子どもが選択して学ぶことを保障する教育課程を編成する方針の下、取り入れられた単元である。子ども達のやりたいことと担当教員のできることをすりあわせて内容を決め、およそ半年間週あたり1時間をかけて学ぶ。教育課程に子どもが学びたいことを学ぶための選択的な内容を取り入れようという試みであった。中学年では「鉄人」、高学年では「達人」という名称でそれぞれ、同様に選択的な時間を設けた。

さらに、2015年の「生活べんきょう」の教育課程では内容構成が①主たる学習事項②文化活動③社会・人間④自然⑤その他の5つの項目に分けられている。「文化活

表4. 和光鶴川小学校の「生活べんきょう」の教育課程表（ベーシックプラン）2015年版<sup>18)</sup>

		4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
主たる学習事項	・ 入学式 ・ 学校たんけん ・ みんなで遊ぼう ・ はっぴょう ・ 2年生 ・ 6年生と遊ぼう ・ さんぽ	・ 春のさんぽ ・ 運動会 ・ 野菜を育てる ・ 紙で遊ぶ ・ 生き物を飼う ・ さんぽ ・ さんぽ(春の自然) ・ 野津田公園 ・ 名人①	・ ジュースを作 って飲む ・ 野菜を食べる (生で・つけもの 調理など) ・ さんぽ ・ 学校の木の実 (やまもも) ・ 名人②	・ 合宿 ・ 水で遊ぶ (水でっぽう) ・ 梅干し作り ・ さんぽ		・ 夏休み発表 ・ ぬいもの(さ いふ・マタン プシ) ・ アイヌの文化 ・ さんぽ ・ 名人③	・ 秋まつり ・ さんぽ (秋の自然) ・ 染めて遊ぶ ・ さんぽ ・ からだ ・ たんけん ・ 多摩動物園遊 ・ 名人④	・ 秋のさんぽ ・ ナイフ ・ 干し柿作り ・ 落ち葉を集めて ・ さんぽ ・ 小山田緑地	・ こまで遊ぶ ・ 飛ばして あそぶ (風と遊ぶ) ・ 小山田緑地	・ おうちの人の しごとインダ ビュー ・ がいこくたん けん ・ 氷・霜 ・ 昔の遊び ・ 名人⑤	・ 低学年劇の会 ・ じゃく ・ 表現 ・ はねトラ舞	・ 6年生を 送る会 ・ 卒業式
	文化活動	あそび おにごっこ ゲーム	紙であそぶ	色水作り におい水	水であそぶ		染めてあそぶ			こままわし ペーゴマ 風・ひこうきなど	昔の遊び	じゃくで 遊ぶ
社会・人間	自分・家族・友達 先生・学校の生活		学校で働く人			アイヌの人 アイヌのことば アイヌの民話				おうちの人の 仕事		
自然		春の自然 虫・花・草 池の生き物 ザリガニ釣り		川の生き物			秋の自然 雑木林や 原っぱの生き物	動物の体 からだたんけん	風の色 風向き	霜柱・雪	じゃく おと	
その他	たべる お話を たのしむ	春の味覚	ジュース・ゼリー つけもの・野菜	梅干し		アイヌのおどり アイヌの文化・旗 祭り(紙・うたなど)	アイヌの料理	秋の味覚	干し柿	凍らせて 食べる	お話を劇にする	
自治	そうじ当番 6年生と一緒の 生活当番		班を作る(合宿)		班を作る(秋まつり)		班を作る			班を作る		
発表	子どもの持ってきたものを発表 ○○で見つけた・やってみた・作ってみた											

動」の項目は「あそび」と「つくる」に、「その他」の項目は、「たべる」、「文化」、「自治」、「発表」の4つに分けられている。つまり、内容的には9つの項目から構成されていることになる。この中で、「ジュースを作って飲む」という単元のように「主たる学習事項」、「文化活動」、「その他(たべる)」の項目にまたがって設定されている教材がある。また、「こままわし」のように文化活動(あそび)の中だけに設定されている教材もある。1995年版では「磁石で遊ぼう」は「自然」だけに入っていたが、2015年版では「磁石」は「自然」に、「磁石で遊ぶ」は文化活動(あそび)に入っている。「空気と石で遊ぶ」は文化活動(あそび)に入っている。空気と水という単元は、2015年版では「水であそぶ」(文化活動・あそび)、「水でっぽう作り」(文化活動・つくる)と「風の色・風の向き」(自然)というように詳細に示されるようになった。

### 5. 「生活べんきょう」の教育課程についての考察

以上、「生活べんきょう」の教育課程の編成について検討してきた。そこには2つの特徴が伺える。

第1は、一貫して子どもの学校生活との関連が密にとられているということである。公立の学校では、学級活動の時間は「特別活動」に位置づけられている。これは教科教育とは異質なものであるという位置づけである。和光小学校の教育課程には「特別活動」という位置づけがない。それは子どもが学校生活から学ぶ事は個別の時間に学ぶのではなく、総合的に学ぶことがふさわしいと考えてい

るからである。和光小学校では、班替え・席替えについては、学校生活を焦点として行われる。例えば、運動会前であれば「運動会を優勝するための班」であり、合宿前であれば「合宿を成功させる班」をつくることを目的として、班長選挙が行われ班が編成される。行事や子どもの取り組みといった学校生活と活動の関連を密にとれるように、その両方を総合的に扱う時間として「生活べんきょう」が位置づけられている。1995年版の改訂以後、手仕事の内容が教材ではなく、活動で示されるようになったのも、子どもの生活とのつながりを密にするためであった。学校生活の中で遊ぶこと・学ぶことをそのまま教育課程に反映できるように「生活べんきょう」を位置づけていった。そのため、低学年における「生活べんきょう」は、子どもの遊びたい・学びたいという要求を全面に出した形、つまり行事や活動を中心とした単元を構成することが可能となる教育課程が編成されるようになった。

その典型が「見つけた・はっぴょう」(後に「子どもが持ってきたものを発表」に変更)である。学習指導要領でも生活科に発表・表現は位置づけられている。生活科における発表・表現は子どもの表現の仕方に関する指導であり、言語活動の充実や円滑なコミュニケーションを行う力の養成を目指している。和光小学校の「見つけた・はっぴょう」は、子どもが関心を持ってクラスの仲間と訴えたい内容を取り上げ、それをもとに後の単元にかかれていく。つまり、和光小学校の「見つけた・はっぴょう」は子どもにコミュニケーションを行う力としての発表の仕方といった形式的な力が大切にされるのでは

なく、子どもが何に関心を持ち、それが周りの子どもにどのように受け入れられていくかという実質的な内容を大切にしている点に特徴がある。子どもが教育内容の決定の一部を担っているという内容構成は、これまでの教育糧編成にあまり例をみない。

第2は、選択的な内容の導入である。和光小学校では、教育課程を固定的なものとして考えず、そこに選択的な内容「名人になろう」を取り入れている。子どもが自分の選んだ内容に関して学ぶことができる教育課程編成は、初等教育ではあまり見られない。和光小学校の「生活べんきょう」の教育課程が、低学年から子どもが学ぶ内容を選択することができる編成方法をとっていることは特筆に値する。

### 6. 「総合学習」の教育課程編成の実際

「総合学習」の教育課程編成について見ていく。1985年版の教育課程では3年生から6年生までに13のテーマが設けられていた(表5)<sup>19)</sup>。和光小学校では、「総合学習の目的は、現実生活の中に今日的な課題をとらえ、仲間とともに問題解決の主人公となって能動的、探求的に学び、主権者としての自覚を深め、自立した市民として生きる人格を育てること」とされていた<sup>20)</sup>。そ

の環境を取り戻そうと行われていたサケの放流プロジェクトに参加する学習であった。社会的な運動と学校の学びをつなぐ学習とされた。後に、放流自体が環境破壊につながるとされて、運動の収束とともにこのテーマは廃止された。「インフルエンザ予防注射」はインフルエンザが流行する時期に自分の体を守る学習として位置づけられた。「食べものからだ」では食べるものによって自分たちの体がどのような影響を受けているのかを考える学習であった。「流行を考える」は社会現象について考える学習であった。「養護学校との交流」では養護学校との交流を通じて障害を持つ人との関わりについて考えた。「愛と性を考える」では思春期に向けての成長を心身両面から考える学習とされた。「ヒロシマ」は原子爆弾の被害を受けたヒロシマを対象として、平和について考える学習である。学習旅行でヒロシマを訪れ、その実際を見聞きすることを含む学習であった。後、「沖縄」へと転換される。「家の仕事」は身近な家庭の仕事を見ていくことを通して、仕事について考える学習であった。

1997年版では、テーマが大幅に変えられている。「カイコの学習」は「蚕を飼う」として継続されている。他にも、「私のケガ・病気・障害」が「けが・病気」として、「愛と性を考える」が「思春期の体と成長」として修正されながら残っている。

表5. 和光小学校の「総合学習」の教育課程 1985年版

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
3年	カイコの学習			私のケガ 病気・障害			環8と生活					
4年	環8と生活			私の十年史			インフルエンザと 予防注射					
5年	食べものと健康/ 食べものからのぞく			流行を 考える			養護学校と の交流					
6年	愛と性を 考える			ヒロシマ			家の仕事					

の目的の下、現代社会を生きる上でさけて通れない『今日的な課題』を対象としている。そこで「人類の尊厳」「平和の希求」「自然と人類の共存」などをテーマとしている。テーマは学年の教師が選択して、学校全体の合議を経て決定する。「カイコの学習」はカイコの卵から飼育、糸取りまで一貫して行う中で、製品や産業まで広く学ぶ。「私のケガ・病気・障害」については、和光学園の方針である「共同教育」<sup>21)</sup>と関連させ、学級活動と合わせておこなう。「環8と生活」は学校の近くを走る幹線道路である環状8号線を教材として、排気ガス、騒音、交通量などを測定した上で、環境について学習する。「私の10年史」はこれまで生きてきた10年を振り返って考える学習である。「多摩川にサケを！」では当時、多摩川

表6. 和光小学校の「総合学習」の教育課程<sup>22)</sup>

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
3年	カイコを飼う			木または土			けが・病気					
4年	多摩川／川と人間と環境			私たちの体 と成長								
5年	食べものと健康／食べものからのぞく			思春期の体 と成長								
6年	沖縄			私の憲法 手帳／人権・ 子どもの権利								

新しく3年生に「木または土」が位置づけられた。素朴な自然の素材から学ぶ学習が、入門期の「総合学習」のテーマにふさわしいとして実践が展開されるようになった。4年生は環境問題への積極的な取り組みがより見えるようにと環8の学習を取りやめ、「多摩川」をテーマとする学習に切り替えた。ここでは、サケの放流といった行事の学習ではなく、多摩川と人間と環境の関係を総合的に捉える学習として位置づけなおした。多摩川の歴史、魚取り、鳥や虫、野草、上流・中流・下流の相違、それらと関わる人を次々に捉えていく学習となった。「沖縄」は「ヒロシマ」が経年によって、子どもが見てわかる遺跡・証言者が少なくなっていったことなどから、学習の内容の根幹は平和の問題としつつ、フィールドを沖縄に変えた。「沖縄」ではその独自の文化、歴史、自然、地理などを学びつつ、沖縄戦・米軍基地の問題から

平和学習につながる壮大な「総合学習」を構成するようになった。「沖縄」は基本的な学習計画がたてられるものの、中心的な内容はその年々の時事的な問題と関連させて学ばれるようになった。例えば、時事的な問題として、米兵による婦女暴行事件、教科書検定問題（集団自決の問題）、普天間基地移設問題などが取り上げられてきた。「わたしの憲法手帳／人権・子どもの権利」については、新しく取り入れられた。子どもの権利条約の学習を核として、日本国憲法について知った上で、考えることを学習の内容とした。

2015年版では、これまでと異なり「異文化・国際理解教育」の学習が大きく取りあげられるようになった。ここでは英語の学習を行うのではない。「異文化に触れる中で、世界には多様な国や民族があることを知り、グローバルな世界観と他民族理解、そして共生の思想を子どもたちの中に育てる。」こと「『国旗』や『国歌』『通貨』などその国をよくあらわすものと出会ったり、『位置』『都市』『気候』などその地方の世界地理的な側面に触れながら、異文化の中味に直接出会ったり、触れたり、体験したりする中で、民族理解や人間理解を広げ、『共に生きる』考え方を育てる。」さらに「外国語活動を、交流文化などの具体的な学習活動を目的にして取り組み、『言語コミュニケーションする意欲や素地』を育てていく。」としている<sup>23)</sup>。これまで和光小学校の「総合学習」は学年によるテーマ学習であった。2015年版ではテーマ設定について、学年テーマという形態だけでなく、テーマの特徴から整理がされている。

2015年版では、「総合学習」の教育課程は以下の3つのテーマ群に整理されている。

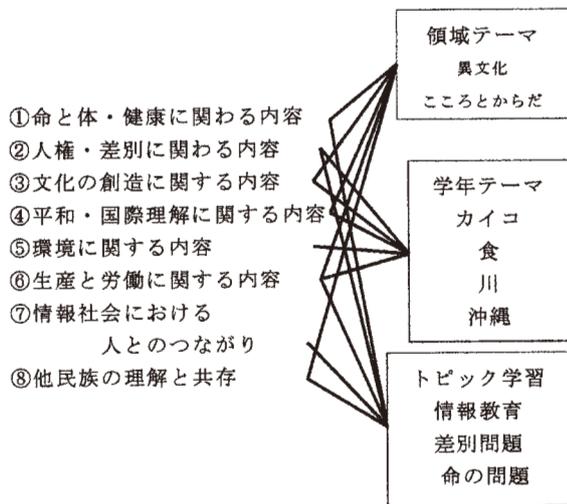


図1. 「総合学習」の内容とテーマの関連

- ①領域テーマ学習：『異文化国際理解教育』『こころとからだの学習』は各学年で学ばれる。この単位については、子どもの発達・成長に合わせて学習内容を組織していく教育課程が必要であると考えられるようになった。
- ②学年テーマ学習：「かいこ」「多摩川」「食」「沖縄」はその学年でテーマを決めて学習する単位である。その年々の時事的な内容が取り入れられる。
- ③トピック学習：タイムリーな内容について短時間で取

り組む単元の設定を可能にした。その時に話題の内容を盛り込み、新しい実践を生み出す可能性を拓く教育課程編成とした。

以上のようにみえてくると、和光小学校の「総合学習」の教育課程は、次の8つの内容を基軸に3つのテーマ群で編成されているといえる。

- ①命と体・健康に関わる内容
- ②人権・差別に関わる内容
- ③文化の創造に関する内容
- ④平和・国際理解に関する内容
- ⑤環境に関する内容
- ⑥生産と労働に関する内容
- ⑦情報社会における人とのつながり
- ⑧他民族の理解と共存

これらが8つの内容が、それぞれのテーマと交錯しながら学ばれていくという構造になっている（図1）。

## 7. 和光小学校の「総合学習」の教育課程に関する考察

和光小学校では、教育課程の編成に関する日本における社会的な議論をふまえて、世界を取り巻く情勢をふまえて、子どもが学ぶに値するものは何かを考えながら教育課程を編成してきた。「総合学習」はその中で、最も大きく変化することを要求されてきた領域といえるだろう。

和光小学校では、当初、社会的な議論をふまえて、これまでの自らの教育実践に依拠しながら低学年に「総合学習」を導入した。その後、低学年は「生活べんきょう」、中高学年は「総合学習」として、それまでの和光小学校の教科や教科外、学習旅行等で実践されてきた成果をふまえてテーマを設定・実施にふみきった。その後、内容が検討されて、テーマが修正されてきた。その中で、典型的な修正を行ったのが「多摩川」と「沖縄」である。当初、多摩川をサケが戻ってくる川にしようというイベントとして行われてきたサケの稚魚の放流に小学生が参加することによって学ぶという「総合学習」を展開していた。ところが、放流自体が環境の破壊につながるということが明らかになったことや子どもと多摩川の関わりは、そうしたイベントではなく日常的なものであることが大切だと考えられるようになった。そのため、実際に多摩川に出かけていく機会を増やし、子どもの関心にそって、多摩川の魚、鳥、草花、そこに集う人々など小テーマを追求するグループ学習と上水道の学習のようなクラス・学年全体で共通して学ぶべき内容に精査して単元を展開していった。「総合学習・多摩川」の学びは、当初の社会的な関心事から子どもの関心を誘発するような展開で始まったが、その後、子どもの関心事から社会を見ていく展開へと学びのベクトルが転換された。この転換は、「総合学習」において子どもが主体となる単元構成を考える上で大きな意味があった。子ども主体の教育課程づくりにおいては、「生活べんきょう」と同様に、子どもが学ぶ内容の決定に参画することが必要であると言える。

「ヒロシマ」から「沖縄」へのテーマ変更によって、それまでには見られなかったエイサーや言葉、紅型、沖縄

そばに始まる料理など沖縄独自の文化、地理、気候、基地問題といった内容的な広がりをもった学びができるようになった。「総合学習」はテーマやフィールドによって、学びに大きく広がりを持たせることができるということを示している。子ども達は、沖縄の文化や自然と沖縄戦や基地問題にみられる東京と現地沖縄の差に目を向けるようになり、学びが広がると同時に、感性的にも学びを受けとめ、深い学びへと到達できるようになった。

## 8. 小学校におけるカリキュラム・マネジメント

以上、和光小学校の教育課程の自主編成について見てきたように、小学校における生活科・「総合的な学習の時間」のカリキュラム・マネジメントとしては、その内容をどのような構成するかが焦点のひとつである。和光小学校の場合、当初は教科横断的・合科的な内容を構成していたが、その後実践を重ねる中で、「生活べんきょう」においては、子どもの生活を中心としたカリキュラム・マネジメントを行うことにより、子どもの持ち込むものを取りあげて単元を構成する「見つけた・はっぴょう」が導入されるようになった。「総合学習」では、子ども達がフィールドに出かけ、そこで見たこと・聞いたこと・触れたこと・感じたことから学び取ったものを内容として組織していく単元構成をとるようになった。こうして、和光小学校では、子どもの生活から学ぶことを追求してきた結果、子ども自身が教育内容の決定に参画できる方向へとテーマ・内容を転換していった。子どもの参画をもって子どもが主体となるカリキュラム・マネジメントを行ってきた。

こうした和光小学校の「生活べんきょう・総合学習」の教育課程の構成を考察することによって、生活科・「総合的な学習の時間」のカリキュラム・マネジメントにおいて、教育内容を子どもに委ねるというのが、子どもが主体的・協同的・探求的に学ぶようになるための条件整備として必要であることがわかった。

「生活べんきょう・総合学習」では、ひとつのテーマの中に複数の単元が取り組まれていった。生活科・「総合的な学習の時間」においても、ひとつの単元でひとつの領域・内容を学ぶのではなく、ひとつの単元・テーマの中に複数の領域・内容を含むカリキュラムをマネジメントしていく必要がある。さらには、実践の成果によって、テーマの妥当性が検討される必要がある。その際、テーマ自体が問題なのか、それとも教材が問題なのかを吟味する必要がある。

## 注および参考文献

- 1) 小学校学習指導要領総則「教育課程編成の原則」(第1章第1の1) 小異学校学習指導要領解説総則編 p.14. 平成20年
- 2) 教育課程企画特別部会「論点整理」 p.21. 平成27年8月
- 3) 丸木政臣・行田稔彦編著『和光小学校の総合学習の授業 つくる・育てる・調べ、考える子どもたち p.209. 民衆社(1990)
- 4) 前掲書 丸木・行田(1990) p.202.
- 5) 前掲書 丸木・行田(1990) p.211.
- 6) 和光小学校校内研修会資料(2016.08.)
- 7) 導入当初の年1985年の第3回和光小学校公開研究会発表要項では「生活べんきょう」が週あたり6時間、「総合学習」が週あたり1時間となっている。
- 8) 教育課程検討委員会は、日教組が中央教育課程検討委員会を組織する前段階で組織した委員会である。同委員会は「中間まとめ」を提起している。1974年5月に中央教育課程検討委員会が最終報告書「日本の教育改革を求めて」を発表している。
- 9) 和光学園五十年史編纂委員会編『和光学園五十年』 p.253. 星林社(1983)
- 10) 前掲書 丸木・行田(1990) p.254.
- 11) 前掲書 丸木・行田(1990) p.255.
- 12) 前掲書 丸木・行田(1990) p.212.
- 13) 前掲書 丸木・行田(1990) p.182-183.
- 14) 第3回和光小学校公開研究会発表要項 p.19.(1985)
- 15) 第14回和光小学校公開研究会発表要項 p.112.(1996)
- 16) 行田稔彦・鎌倉博編著『和光小学校の総合学習 はっけん・たんけん・やってみる』民衆社(2000)
- 17) 第15回和光小学校公開研究会発表要項 松本あゆみ「世界の〇〇みつけたよ～子どもとつくる生活勉強～」(1997)
- 18) 和光学園研修会資料(2016.08.)
- 19) 前掲 第3回和光小学校公開研究会発表要項(1985) p.19.
- 20) 和光小学校・和光鶴川小学校編『子どもと創る学びの世界』和光学園実践シリーズ② 星倫社(1993)
- 21) 行田稔彦・平野正美編著『和光小学校の総合学習のち・平和・障害を考える』第4章「ともに学び。ともに生きる」参照。民衆社(2000)
- 22) 第15回和光小学校公開研究会発表要項 p.20.(1997)
- 23) 前掲 研修会資料(2016.08.)